にこずみと訓めり、又今俗に、鍛冶の金くそといふあり、是も屑なり、また今俗にほくちといふは、火口の意にて、火の付べきくち故にいふ歟、門戸の意に同じく山口などいふも、端初の意より名付たり、又朽木は火のよくうつる物にて、田舍にては、今も朽木を火くちに用ゆれば、火朽の意にていふにや、

〔本朝食鑑一〕燈火　附燈花燭火、保久知火、

集解、〔略〕中保久知者用厚紙揉之如綿、細截每二三層裹小炭火一個、輕掩乾灰而燒之令黑、候其四面純黑取出、待冷金石相擊、點火著木片而移火、〔略〕中此火常所用之火、而世俗呼稱打火也、祭祀事神時忌火穢者用斯火、又金石相敲點火于槁木片、或用鹽硝木煮木綿而晒乾、亦金石相擊而點火、俱易移火、吸煙草人必忌硝煙傷人而已、

〔權中納言敦忠卿集〕ちかもりがからものゝ使にくだるに、いはにかねのひうちをほくそにぢむをして、玄のぶをすりたるぬのゝ袋に、

うちつけに思ひいづとや故郷の玄のぶ草にてすれる也けり

〔和爾雅五器用〕發燭（ユウウギ）、焠燈、焠兒、火寸、引光奴（ツケギ）、並同、

〔書言字考節用集七器財〕就竹（ツケダケ）則發燭也　發燭（ツケギ）一名引光奴　焠兒同上　火寸同　發燭（ユウウギ）淮南王劉安始制焉、詳輟耕錄、　焠兒同　硫同

附木

黃木

〔隨意錄五〕古取火於日、又取於木、皆名之燧、所謂鑽燧也、然何如取之與、我未知其方、今世所用之屬火木片、未知揥於何時、彼方明世、猶未流行耶、明田汝成、委巷叢談云、杭人削松木爲小片、其薄如紙、鍊硫黃塗其銳、名曰發燭、亦曰焠兒、蓋以發火代燈燭用也、史載周建德六年、齊后妃貧者、以發燭爲業、豈卽杭人所製歟、陶學士清異錄云、夜有急苦於作燈之緩、批杉染硫黃、遇火卽燄、呼爲引光奴云云、今謂建德後周年號、然則當時既有發燭、而至明乃不行何也、且顧之雖既有發燭、金石相打、以取火之方、則明